
バカ × オリ主 × 似非関西弁 = バカの三乗

Twice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカ×オリ主×似非関西弁「バカの三乗

【Nコード】

N3339V

【作者名】

Twice

【あらすじ】

コメディを書きたかった、いな書きたい。そんなわけでスタート。読んで面白かったら感想を下さい。面白くなかったらネタを下さい、お願いします。割と真剣なんだ！コメディとシリアス分の割合は9・9対0・1を目指しています。矛盾、独自設定多数、オリ主に嫌悪感がある人は左上の『戻る』をクリックしてください。以上、解散！

其の一

世界はバカの炎に包まれた——！！！！

「残念やけど、それは夢や」

なんか、阿呆な出だしで済まんな。堪忍してや、これもアレ（作者）が阿呆のせいや。

自己紹介・・・は、また今度でええか？ とりあえずまだ名前も決めてないどころの阿呆がおるからな。

いくら怒っても、殴ってもいつのまにか復活する奴やからな。

そろそろ拷問に切り替えようか、正直迷つとる。

なんかな、阿呆の分際でもう一本書きたくなつたんやって。イリヤちゃんの更新をほっぽってな、
どない思つます？ うんうん、阿呆やってか。そう、その通りや！

おのれは受験生なんやから勉強しとれ！！！！

確かに勉強しとらない気持ちは分かる。けどな、それじゃあかん。
世の中な食うてけへんねん。
いっぱい勉強して、エエとこ就職して、エエ嫁さん貰て…幸せやろ？
のう、うんうん。

まあ、俺は気ままに生きるけど。

例え、妹が宝くじで三億円当てたとしても！ お兄ちゃんは勉強はサボらへんで！（歴史以外）

かくかくしかじかで、文才0の駄文しか書けん作者やけどやる気があるそうなので、よろしくお願いします！

この後、俺と阿呆で三時間に及ぶ喧嘩が繰り広げられたが気にせんといて下さい。

畜生……！ 夜道に気をつけろよ、阿呆が……………！！！！

其の二（前書き）

連続投稿！

其の二

朝、それは俺が最も弱いモノ。多分、ドラキュラの太陽とか、ニンニクとか、十字架なんかよりな。
よゝするに、低血圧やねん。俺。

妹の葵がいつつも起こしにくんねんな？ けどな、起こしてくれへんねん。なんでや、訳分からん。

家族奈々…じゃない、決して奈々様スキーやないで？ 俺やのうて、阿呆が好きやねん。

D o n ' t b e l o n g とかE T E R N A L B L A Z E
とかP r a y とかP H A N T O M M I N D S とか全然知らんで？

ほんまや、信じてゝな！！

それはそれとしてやな
閑話休題

家族七不思議の1つや。ほんまに。10分くらいしたら起こしてれるんやけどな…。

その時は、もう遅いねん。葵はご飯を食ってから起こしにくんねん。時間がないんや…。

やから毎日食パン啜えて走って登校しとる。……なんやフラグって？ おいしいんか？

今日も今日でパンを啜えて登校中や。毎朝こうやって走っとるせ

いか、体力にはちよつと自身あんなんで？

ふと、横に目をやると桜が綺麗なんや。あんな見られんもんやで。なんか得した気分やわ。

学校の玄関に目を向けると、OH・・・・鉄人や。あの人、エエ先生やのにな、怖いねん。

めっちゃ恐いねん。それで、めっちゃ強いねん。敵わんわ。

まあ、挨拶はしとかなな。お世話になつとるし。

「（。・。・A・）ノ・オ・、ヨウ。」「（・A・、・）」「ざいます。鉄人」

「不知火か、遅刻だぞ。それと俺は西村だ。鉄人ではない」

「堪忍してや、ちょう口が滑つてしもたんや。明久とかよりはマシちゃう？」

「アイツは呼びそうになつたが、最後までは言わなかったぞ？」

「そう、で西村教諭はなんでここに？　もしかして不祥事とか？」

あの明久が言わないとは…成長したなアイツも。てか、俺より早う登校するとは……

西村教諭は多分、生徒を殴つたつて罰としてここに立つとるや！

完璧や、俺の推理……！

「断じて違う……ほら、不知火」

「あざーす、ってそんな露骨に怒らんでも……」

紙がくしゃくしゃ。

なるほろ、クラス分けの結果を渡してたのか。これも最先端システムを導入した試験校ならではっちゅう感じやな。きっちり糊までしてあつて、開けにくいわ。

ええい、開かぬなら、破つてしまえ、封筒や！！

「不知火、お前試験の時に姫路を保健室に連れていったそうじゃないか？」

「そうやけど、それがどしたん？」

「いや、お前はそういう事をしなさそうに見えたのでな・・・」

言えへん、歴史以外まったく分からんだから、サボるためにしたなんて言えへん。

「いやゝ、歴史以外サツパリやもんでな鉄人。メンドイからどうしようかと思つた矢先に姫路が倒れたもんで」

うん、もろ言つちまつたZE

けど、姫路にはだまツとこ。あの子はエエ娘や、変な心配を与えへんようにな……。

明久に姫路も居るっちゅう事は、小学ん時の面ツが集まつたんか。まあどうでもええけど。

「はあ、思つた通りだ。早く自分のクラスに行け」

「すたこらっさっさ」

くしゃくしゃに丸めたさっきの封筒には、『F』って書かれた紙

が入っとな。

「うわ、ボロッ」

なんや、全体が腐っとるって感じ？ ついでに言えば、中に居るであろう男子も腐っとると思う。

あれや、適材適所？ なんか違うけど、まあええわ。

明久のバカなら、お茶目に言いつつ教室に入って雄二あたりと漫才をしようと思う。

昔、幼馴染をしとったからな、あの明久^{バカ}の思考回路は読めるんや。気を取り直して、俺も入るとするか。

ドアを開けた瞬間、明久^{バカ}がコッチを向いてきたので踵落として沈める。

「邪魔するで〜」

「邪魔をするんだったら帰れ」

「ほな、さいなら〜って、んな阿呆な！！」

「ナイスノリツツコミだな、希咲」

「ナイスボケや、雄二」

そこでガツと手を交わす俺達。足元には明久^{バカ}が転がっている、それ

を雄二と共に踏む。

「ぐえっ」

「「なんだバカ久いたんか（のか）？」」

「雄二はさっきから話をしてたじゃないか！ それに希咲は踵落としをしてきたし！！」

「いや、バカと話した会話なんてこれっぽっちも覚えていないぞ」

「俺は蠅がおったから蹴り潰しただけや」

「僕の認識ってそんなもの！？」

「「ああ、そうや（だ）！！！」」

「こんなクラス嫌だーーーー！！！！！」

ボロ臭いドアに走って行き、急いでドアを開ける…がそこには冴えないおっさんがいた。

「どうしたのですか、吉井君。これからHRホームルームを始めますよ？」

「先生！ あの二人が僕を苛めるんです！！」

明久は俺と雄二に向かって指を指してきた。なんか腹が立ってきたわ……。

「あゝ、不知火君、坂本君。HRホームルームを始めるので席に座って下さい」

「「はい」」

「なんでだよ!!??」

雄二と共に席に向かう時、一緒に爆笑を堪えていたのはエエ思
出になるやろ、ハッハッハ。

てか、机がちゃぶ台で、イスが座布団つて…どんな設備や……。

其の三（前書き）

時間をおいて連続投稿なり！

其の三

『ダアアアーーーーリイイーーーーン!!!!!!!!!!』

死に腐れ、ゴミ共め。

自己紹介の途中で姫路が教室に入ってきた。次は俺の予定やったけどそのまま姫路がすることになった。やべー、自己紹介考えてなかったわ……セーフ、セーフ。

何を言おうかな、と考えていると俺の番が回ってきた。姫路は俺の後ろに座ったが特に意味は無いと俺は信じとる。

「不知火希咲や。得意科目は日本史と世界史。趣味はゲーム、よろしく頼むで!」

よーわからんけど、軽く微笑んだら何人かの腐ったゾンビ共が鼻血出して死によった。

何が起きたのか考えとったら後ろの席の姫路がつんつんと俺の肩を突付いてきた。

先に言っておくと、俺の前の席がバカで、右隣が雄二、左隣が秀吉や。ムツツリー二は左斜め後ろやな

それ以外に言うと、雄二の後ろは誰もおらん。席はあるのにな。後は……島田とかモブキャラだけやな。どうでもええ奴等や。お

ってもおらんでも変わらん。

てか、明久^{バカ}の分際で俺の前に来るとはな・・・万死に値するんじゃない？

「なんや、姫路」

バレへんようにこっそりと後ろを向くと、姫路がビクッてなってそれから即行でなんや、メモ帳にシャーペンで書いた紙を渡してくれた。

そこには、こんな事が書いてあった。

『振り分け試験の時はありがとうございました。お陰様で体調の方はとても良くなりました』

ですが、不知火君がFクラスになってしまったのは私のせいなんでしょうか…？

もし、そうだったのなら本当にご迷惑を掛けてしまいました。許してほしい、なんて駄目

なんてしょうが、本当に申し訳ありませんでした』

……なんや、どえらい罪悪感が……。

と、とりあえず、この誤解を解いとかんと大変な事になる気がするなあ…

「姫路」

「は、はい」

「お前のせいじゃあらへんよ」

「へ？」

「俺なあ、自己紹介でしたように日本史とか世界史ぐらいしかよー頑張れる科目ないんよ。」

「せやから、どの道Fクラス行きや」

「で、でも他の科目を合わせたらEクラスやDクラスには……」

「これでは、姫路のせいになってまうなあ…誰か助けてくれへんかなあ〜。」

「残念じゃが姫路よ、こやつの理系テストや国語のテストをちらつと見たのじゃが」

「2桁取れていれば良いほうじゃったぞ？」

「ほ、本当ですか、木下君？」

「ナイスや、秀吉！これで勝つる！！ちょっと俺に失礼やけどな。」

「そうそう、どうせこいつの事だから『誰か倒れたらそれをいいわけにしてサボれるのになあ』とか考えてたに違いないぜ」

「雄二、余計な事を…！まあ、ほんまの話やからいいわけできんしな…それに」

「下手にいいわけすると、また余計な事言われそうやし……」

「けど、助けてくれた事には変わりないので…ありがと〜ございませう」

ザシュッ！ズシャッ！ボロボロボロ…。

あ、あんまりの純情さに心が砕かれよった…も、脆すぎるで。俺のハート……。

「と、とにかくやな、姫路、気にすんなや。あんまり気ー使ってもろとると、内心罪悪感でつぶれそうやわ」

「は、はい。頑張ります！」

「よろしい」

何を頑張るのかは知らんけど、これで一件落着やな。

……前の明久^{バカ}がちらちらこっちを羨ましそうに見とったのが腹立たた。

せやから、さっきの分も合わせて顔面に1秒間に5回ぐらい殴るのを1秒やった。

計、15回や。これでもまだ足りんな

「はいはい、その人達。静かにしてくださいね」

「すまん先s」

先生が俺等注意しようとしたらしく、ボロの机をトントンと叩いたら俺の心のように砕け散った

……これはちょーやり過ぎやろ、学園側……

姫路のターン

やっぱり、不知火君は優しいです。こうやって困っている人を助けてくれるんですから。

……でもやっぱり、私だけに優しくしてほしい……。

そして小学校の時からそうでしたが、さらに綺麗になってます
いつみても癒されます／＼／＼／＼……はっ！いけないです。またトリップしちゃいました…。

不知火君にはやっぱり名前で呼んでほしいですし、私も呼びたいです。そしてゆくゆくは……／＼／＼／＼
不知火君に頑張れって言われたからには、姫路瑞樹、一生懸命頑張ります！」

「ど、どしたん姫路！？ 急に声出して……」

「い、いえ何でもないです！／＼／＼／＼」

うつかり、口に出してしまったようです。は、恥ずかしいです／＼／＼／＼

俺のターン！

さっき、雄二と明久がローカに出て、なんやこそそしとった。
俺の直感やと、どえらい事してくれそうで、ウキウキしてきたわ！
どーでもええけど、俺の脳内変換では明久「バカになつとるから
ルビにバカって出るんや。」

冴えない先生が机を持って来て、自己紹介がまた始まった。
どうやら、雄二が最後らしい。せやから雄二の後ろは空いとったん
か。

さて、我等がバカの集まりの代表はどんな事をヤラカシテくれる
んやろかな？ 楽しみや。

余談やけど、後であの机の強度を測りたくなつた奴は恐らく俺だ
けではないな。

其の三（後書き）

T「みんな、元気ー？ 反省会の時間だよ」

希「暑いのに、希咲や」

葵「もう、お兄ちゃん！ しっかりしないとね。葵です！」

T「先に謝っておきます。苗字を四月一日から不知火に
わたぬき
勝手に変えました、ごめんね」

希「ごめんで済んだら、けーさつはいらんのやで？」

T「そうですね」

葵「しっかりしないとダメだよ？ 作者さん」

T「分かりました！！ 以後、無いようにします！！！」

希「（なんやこの差別は……）」

T「とりあえず、ヒロイン候補を挙げておきますね
姫路瑞樹、木下優子、不知火葵様、あと未定」

葵「あれ？ 私入ってるよ？（本当がいいな）」

希「兄妹愛つちゅうわけか？（嘘やろな）」

T「そうだけど？」

葵「やった〜」

希「なんやて!?!」

T「良かったね葵様」

希「どーゆー事や、作者!?!」

T「そのまんまの意味だ、男の娘」

希「ええい、腹が立ってきたわ・・・氏ね、作者!?!?!?!?!」

T「ハッハッハ、そんな攻撃あたらんわ!?!」

葵「喧嘩は、メッ!」

T・希「分かりました、葵様」

其の四（前書き）

問、以下の意味をもつことわざをこたえなさい。

『（１）得意な事でも失敗してしまう事』

『（２）悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞樹の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

不知火希咲の答え

『(2)泣きつ面踏んだり蹴ったり殴ったり崇られたり』

教師のコメント

悪魔がここにいました・・・。

其の四

それはそれとしてやな

閑話休題

イキナリこれから始まる小説なんて過去に例を見やへんやろうな。雄二の自己紹介&クラス代表としての何かがあるやろうから、それまでこの便利な言葉の意味について深く語ろうと思うとる。

まず、直接的な意味で『文章で余談をやめて、話を本題に戻すときに接続詞的に用いる語』らしいんやわ。

多くの小説群やと『それはともかく』って感じにルビを振るんや。俺の場合は『それはそれとしてやな』と似非関西弁モドキにルビを振つとる。各々意味を逸脱しないようにルビを振つてこか。

言葉を分けよか、まず閑話つて意味は『むだばなし』これに尽きる。他に心静かにする話とかも意味

としてあるけど、閑話休題のときの意味としてはあわへんな。

休題の意味は『それまでの話を一時やめること』のようや。んでこの2つの意味を分かりやすいよう

にすると——なんや、もう雄二の番かいな。しゃーなしやな、これで閑話休題の意味はよー分かったか？

まあ、所詮Fクラスの代表やからな。恥晒しのなんでもないんやけど……雄二は他のバカとは違うからな」

「（はうー、不知火君の笑顔が可愛いですう／＼／＼／＼）」

な、なんにや！ この電波は！？ どこから発信されとるんやゝゝ！？（灯台下暗しって知ってる？）

それはそれとしてやな
閑話休題！

いよいよ雄二の自己紹介や。ほんま楽しみやな、何をしてくれるんやるか？ バカの総大将やけど
あいつは他のクラスの代表とは一味も二味もちやうからな！

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」

「じゃあ、雄ちゃんは？」

すると、雄二はおもむろに何かを俺のちゃぶ台に投げてきた

ザシュツ！

「しゃ、洒落にならへんで…？ 雄二……」

「次は無いぞ」

いや、普通ハサミを投げてるか！？ 歯止めの効かんバカばつ
かのクラスやけども……。

少しばかり雄二に友達の扱いについて教えてやろうと思った…え、
明久？ あれは玩具や

「さて、皆に聞きたい」

バカの総大将がゆつくりと、ここにいる全員の目を見て告げてきた
……上手いやり方やな、話の間の取り方が上手やから皆が雄二の方
を向いて話を聞きよる

クラスの様子を見て確認して、雄二の目線が教室の各所に向けられた。それを皆が追って行った

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れたちゃぶ台。…俺のはさっきのハサミで穴開いとるけどな……。

うん、糞ボロボロやな。姫路が可哀想や。こんな設備やとすぐに体の調子が悪くなるんとちゃう？

ま、その時はその時や。今は……この状況を楽しめばええか。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

そついや、葵はAクラスやったな。ええなあ、夏とか絶対エアコンガンガンやん。こっちは超ー自然に優しいで。バカには厳しいけどな。

「不満はないか？」

『大ありじゃあああつつつ！！！！！！』

これぞ、2年Fクラスの魂の叫びや。ほれ、ちらほらと教室からバカの声が聞こえるわ。

「だろう？ 俺だってこの状況には大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ！！！！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！！』

『扇風機ぐらいはつける～～～！』

最後のは俺や。夏はマジで死ぬやる……一人一個なんて贅沢は言わん。俺や秀吉、島田なんたらや、姫路にだけ付ければええやる。あとは死んでも構わん。どうせゾンビの軍団やし。

「これは代表としての提案だが――」

自身満々にして野性味満々の八重歯を見せながら我がクラスの代表は、言い放った。

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
かくして俺達FクラスバカのFクラスバカによるFクラスバカのための戦争が
始まるうとしていた。

♂ ♀
♂ ♀

Aクラスへの宣戦布告。正直に考えればバカらしい事や。これや
とクラスから不満の声が出るんとちゃう？

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいれば何もいらない』

やっぱ「…待てい、なんや最後の奴……脳味噌のネジがブツ飛ん
どるんとちゃうか!？」

おかしいでホンマに……。

そういえば文月学園に上限がないテストが導入されてから4年経
つそうや

このテストは1時間という制限時間はあれど、無数の問題が用意
されとるから、自分の能力次第では無限に点数を取れるんや。

それに、科学とオカルトと偶然がフュージョンして生まれた『試

験召喚システム』って言うのがある。

これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦う事が出来るシステムで、教師の立会いの下で行使出来るんや。教師しか召喚獣を召喚出来るようにするフィールドを形成出来へんからな。

学力の低下が嘆かれるからどうせゲーム感覚で勉強させるモチベーションの向上を狙っとるんやな。

これを中心にして召喚獣を用いたクラス単位の戦争　これが試験召喚戦争や。

この戦争に勝てば、そのクラスと教室を入れ替えることが出来る。あくまで出来るだけやけどな。

勝利にはテストの点数が重要なんやけど、AクラスとFクラスの差は天と地程の差がある。召喚獣の能力次第やけど、多分1対5でやっと勝てるかどうかや。そう戦争は甘ないんや。殆どが自分より点数の5、6倍の奴等やで？　上手く立ち回らへんと一瞬でやられるわ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてやる」

これだけの戦力差がありながらも、エライ自信やな。雄二。秘策があるんやろな。

『何をバカなことを』

『出来るわけないだろう』

『何を根拠があってそんなことを』

多分このバカ共の根拠はエエ鴨やな。主に18歳未満観覧禁止とかの。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことの出来る要素が揃っている」

お得意の不敵な笑みを浮かべながら、壇上から俺達を見下ろす。
『みくだす』ちゃうで、『みおろす』やで。みくだしするのは、明^カ久^バだけや。

「それを今から説明してやる」

(ん?)

俺に視線を向ける悪友。——アイコンタクト、理解。成る程そーゆー事か。

まず、標的はあの変態や、雄二ー!!

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を千切れるくらいに左右に振り否定をする康太。

バカやな。さっきアイコンタクトした時に、こいつの現状を伝えたんや!

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

こいつ、土屋康太の本名はさほど、有名ではない。しかし、駄菓^{だが}子菓子ムツツリー二となると、話が360。………って一回転しとるがな、180。変わるんや。

男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑と侮蔑と嘲笑を以って拳げられる。

『ムツツリー二だと……………？』

『バカな、ヤツがそうだというのか……………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ……………』

『ああ。ムツツリー二に恥じない姿だ……………』

変態やな、知つとつたけど。何がムツツリー二に恥じない姿や。普通やと警察に通報するで。実はうつかり俺もしそうになった。まあ、未来永劫ムツツリー二にエロとかムツツリとかスケベとかの言葉は付き纏うからな。どれだけ通報すればええねん。

「……………？」

姫路は純粹でエエ娘やな。絶対にFクラスに染めたらアカン。……………おい、明久^{バカ}。もしムツツリー二が単なるムツツリスケベって事ばらしたら……………お前のこと、殺^{バラ}すで？

「（ゾクッ！）」

おお、エエ感じにビビッとする。楽しいな。明久^{バカ}いじりは……♪

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその力はよく知っている筈だ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

「姫路おらな召喚戦争勝てんでな。頑張ってな」

「不知火君……はい！ 頑張ります！！」

ホンマ、エエ娘や……（涙）

葵は最近、俺にあんま甘えてこうへんし、悲しいんや、俺。

「木下秀吉だっている」

秀吉、演劇部のホープ、期待の星。そして俺の一番の理解者であり、一番の親友や。なんか1年の時に俺の男義に引きつけられたんやろな！ 「ワシらは似たもの同士じゃ！」って。なんで似たもの同士かはよくわからんけど、フフ、俺の本質を良く分かっとなるヤツや。

「激しく勘違いを受けておる気がするのう……？」

「気のせいや、秀吉」

そついや、秀吉のねーちゃんってなんかきな臭いやよな。前に遊びに行った時、かなり挙動不審やったし。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうなヤツだ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じ体調不良だったのか』

『实力はAクラスレベルのが二人もいるってことだよな！』

おお、なんかやる気が出てきとるで！ 雄二は阿呆やのに！

「それに、吉井明久だっている」

……シン――

うわー、寒。ゲームで例えたら、ぜったいれいどされた後、マヒヤド、そしてヘイムダルを落とされた後にアイスソードで滅多刺しにされた気分や。ねんがんの アイスソードを てにいれたぞ！

は置いて、とどのつまり一撃必殺。

迷惑かけんなよー、明久^{バカ}ー。

「ちよつと雄二！　どうして僕の名前を呼ぶのさ！　全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

『なあ秀吉、明久^{バカひさ}って誰や』

『すまぬがワシもよく知らぬのでな』

「ホラ！　折角上がりかけたきた士気に翳りが見えてるし！　それに最後の希咲と秀吉だよね！？　流石に酷くない！？」

『『お前のせいで士気が下がったんだろう！！！！』』

「それは酷すぎるよ！！！！」

「そうか、皆は知らないのか。なら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

「それって明久の代名詞、つまりバカの代名詞やろー」

観察処分者、ムツツリー二がKING OF EROの称号なら
観察処分者はKING OF BAKAの称号や。

これは召喚獣は普通モノとかに触れんのを触れるようにして、教師

の雑用をさせるものや。やけど疲労や痛みがフィードバックすると
言うデメリットがある。

さっきも説明したように、召喚獣は先生の下でしか呼び出せない
からな。ハイリスクノーリターン、バカに厳しい罰ゲームやで。歴
代該当者はこの明久バカしかおらんけど。

「希咲！？ さっきから酷すぎだよ！！ 僕を何だと思ってるの！
？」

「なあ、雄二。明久のことどう思う？」

「どうもこうも・・・」

「「玩具に決まっているだろう」」

「お前等なんか友達じゃない！！」

心配すんな。俺も友達やと思ってないわ。何故なら……

「明久……お前は俺等の大切なバカひさ……」

「希咲……」

頬を紅くすな、きもいわ。

「俺等の大切な、

——玩具やる？」

「お前は悪魔だ！……！」

「大事なことやから2回言ったんや。そして俺はまだ悪魔やない。本当の悪魔は……」

「え、一体何が……！？」

あれはトラウマものやった。ありとあらゆる手段を用いて、俺の冷静さ、行動、作戦を悉く妨害し、必ずそうしなければいけないように促すという……。それを何回されたことか……。まあ、ご褒美はあったけど。

「判決、お前はう罪」

「何！？ その理不尽な罪は！？」

「そうだ、皆に紹介しよう。ウチの切り札にして最高の一手、不知火希咲を」

「うわ、大胆にスルーされた!!」

「……エライ待遇やな、雄二」

「え？　もしかして僕ってKY？」

「それだけ信頼を置いているんだ」

「工工事言ってくれるやんけ。これは活躍せなな」

「不知火…希咲……？」

「もしかして、あの不知火様が……？」

「やったぞ！　これで勝つる!!!」

「すげー士気の向上が見られるな。なんでやろ、俺って特に何もしてないで？」

「こいつがいれば、さっきのバカがいたとしてもお釣りが帰ってくる！　さあ、お前等これでも勝てないって言うてのんか!!」

「行けるんじゃないか！　俺達!!」

「ならまず俺達の力の証明にDクラスを征服しようと思う」

『よっしゃあ！！！！』

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！ 出陣の準備だ！！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのはちやぶ台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！！」

『うおおーっ！！！！』

「お、おー……」

姫路もしっかり手を上げてくれて……。俺もやる気出そか！

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事に命^{たいやく}を果たせ！」

俺には使者が死者に、大役が命^{たいやく}に聞こえるで。つまりは畏^{おそ}やな（・・ω・・）キリッ

「……下位勢力の宣戦布告って大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫や明久。俺達がこういった場面で嘘なんか付くか？」

「……うん、そうだね！ 信じるよ！ 希咲、雄二！」

「「おし、じゃあ逝ってこい！！！」」

「行ってきます！！！」

ガラガラガラ、ボタン！

・ ・ ・

「ちよろいな、あの明久^{バカ}。なあ雄二？」

「ああ、そうだな。俺達はこんな場面でも平気で嘘をつくのにな……」

「ハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！」

明久^{バカ}がボロボロになって帰ってきたのは、それからそんなにも時間は掛からなかった。

其の五（前書き）

ああ、其の四と比べると落ちた（質と量が……）

其の五

後ろから調教やら折檻とかなんか怖い単語が飛んできたけど無視だつてまだ俺はコツチ側の人間や。明久^{バカ}とか島田とかムツツリー二とかと一緒にせんといてほしい。

俺達が今向かつとるのは屋上や。昼飯と作戦会議をする予定。せやけど……。

「しもた、昼ご飯貰てくるの忘れた」

「どーするんだよ、希咲」

「これから作戦会議やる？ あいつ呼ぶのもなんやし…俺、ちよつと取って来るわ」

「売店いくのか？」

「貰て来る言つたやろ。今から貰いに行くんや」

「ほう、彼女か？」

「なんや雄二、ニヤニヤしよつて。俺に彼女なん？」希咲君！？
彼女がいるんですか！？」

「おらへんわ、姫路。にしても流石女の子、この手の話題には食いつくなあ」

さっきよりもつとニヤニヤし始めたで、雄二のヤツは…何がおも

ろいねん。

姫路にしたって、イキナリ顔を紅くして「い、いえ…その…き、気になって／＼／＼」まあ、わからんでもない。この手の話題はおもしろいからな。けど人の恋路の邪魔をする奴は馬に蹴られるって言っし、あんまちよっかいは出せへんのやけどな。

「俺、妹おるやろ？ そいつが昼ご飯作るねん。多分持つてるんやと思っんやけどな……」

きつとあるはずや。なかつたら、泣く。

「確か・・・葵ちゃんでしたっけ？ 不知火君の妹さんは？」

「そうや、よう覚えてくれとったな、姫路。あいつも会いたいつて言っとったで〜」

「そうですか♪ なら今度会いに行ってもいいですか？」

「構へん、構へん。ナンボでも会ったつてくれや」

「あ、明日宜しければ、お弁当を作ってくださいようか？ 葵ちゃんにも食べてほしいですし」

ビクンッ！

一瞬、体が震えた。な、何でや！？ 普通に明日の昼飯を作ってきてくれるだけやろ！？

「ありがとな、姫路。それならその明久^{バカ}の分も作ったつてくれへんか？」

「？ なら全員分のお昼ご飯を作ってきますよ？」

おお、栄養がどっかに出張してつとる明久^{バカ}以外の全員にも作ってくれるんか！ エエ娘や姫路。けど、量がちと多過ぎへんかなあ。結構な量になるし……。

「けど大丈夫か？ そんなにもいっぱい……。よし明日の朝、俺が取りに行くわ」

「え！？ いいですよ、不知火君！？」

「明日、絶対取りに行くでな。待つとつてな」

「待つてください！ 不知火君」

姫路の反論を聞かず、俺は屋上のドアを開けさっさと葵のいるクラスに向かった。

♂
♀
♂
♀

「確か、Aクラスやったよな……？」

さつき葵からメールが来とった。内容は『お昼ご飯は私が持つて
るからAクラスに取りに来て?』やった。無駄な?やな。これこそ
ハートレス。

「流石、Aクラス…。教室もデカイな」

「あら? 見ない顔ね…? ウチのクラスに何かよう?」

Aクラスの前で少しばかり躊躇しとったら、後ろから声をかけら
れた。振り向いたら、そこには……!

「秀吉の胸が成長しとる……!」

まさか、ホンマに女になるやなんて……。でも前よりも男らしい
なつとるなあ?

「バカ。私は優子。木下優子。あの演劇バカと一緒にしないでちょう
だい」

「なんや、木下さんかいな。これはこれは早とちりを……。さつき
の発言から察するにあんたもAクラスやな? なら葵って生徒知ら
んか?」

「葵ね。あの子なら……。私の後ろにいるわ」

「おったんか」

「……希咲、来たのね。私はお弁当をとってくるから、ここで待つ
ていて」

「さいですか。木下さんどないするの？」

「私は代表達と食べるから遠慮しとくわ。兄妹仲良く食べなさい」

「／／／／優子ちゃんっ！」

「それじゃ、私はこれで……」

……雄二等にメール送った。『一緒に食べへんなった。皆で食
つとして』ってな。

♂ ♀ ♂ ♀

俺、木下優子が苦手やねん。なんか本性を隠しとる感じがしてな
く。皆に聞いてもそんなわけないって聞いてくれへんし……。

秀吉は、挙動不審で「な、何を言っておるのじゃ!? あ、姉上
は決して、腐女子などではないぞ!？」……いや、腐女子じゃなか
ったら何やねん。

それよりあの演劇大好きツ娘がキヨドつとるてのが、めっちゃ怪しいねん。ここは、葵に聞いてみるか。仲がエエって家で聞いたし。

○ ○ ○

所さんが変わって、校庭に来とる。幸いここには誰もおらんからな、根掘り葉掘り聞くで。

「なあ、葵。木下って学校じゃどんなんや？」

まずは、学校の事から攻めよ。わかつとる事やけど、見落としとる可能性があるかもやでな。

「え……？ 兄さん、優子ちゃんに興味あつたの？」

「んー、まあ、そうやな」

「……そ、そうなんだ……」

こいつ、みんなが居る時はなんかツンツンやねん。その代わり、2人っきりの時はめっちゃ甘えてくるけどな。はあ、癒されるで……。あのバカの巣窟は癒し（オアシス）が少ないからな。

「……優子ちゃんは学校では真面目で、可愛いし、みんなの憧れの的だよ？」

「やっぱりか……。ん？ 学校……では？」

「あつ！……ヤバイ……言っちゃった……」

「ふっふっふ、と言う事は、これは学校以外で何かあるんやな！
お兄ちゃんの眼は誤魔化せへんで！！」

「……聞いても、後悔しない……？」

「グハッ！！」

か、可愛すぎるで……。葵イイ！！！！

「俺は……ここで死んでも……『構わん』……」

「ほ、本当に聞きたいの！？」

話に通じてない気がするが、今の俺はさっきの画像を脳内ファイルに保存するので精一杯や。

「じ、実はね……「何の話をしようとしてるの？ 葵」ゆ、優子ちゃん！？」

葵がなんか「あ、私オワタノ（＾o＾）\」ってやつとるけど、俺は今劣化防止フィルタの増築に忙しいんや、後にしてな。

「不知火君？ もうすぐチャイムなるわよ？ 授業大丈夫なの？」

「……よし、保存完了！ ん？ ああ、俺等『召喚戦争』するから授業ないん」

……？ あれ？ 俺、今何だったんや？

『ああ おれら 召喚戦争 するから』

非情に……非常にゆっくりとさっきの俺の発言がリピートされる
……。雄二に怒られる……。どうしよう!? や、ヤバス!!!!!!!!!!

「Dクラス戦で5人は倒せ」

「サ、サー！ イエッサー!!!!」

其の五（後書き）

T「ね、ねむいねん……」

希「おまえ、宿題してないけど大丈夫なん？」

T「大丈夫だ、問題ない（、・ω・）キリッ」

葵「激しく危機感を抱きますね」

希「さつさと終わらせろよな。答えはもろとんやろ？」

T「昨日もらった。作文提出したけど、再提出くらって昨日は1時まででやっとった」

希「……確か、外伝を書いたった筈なんやけどな……？」

葵「嬉しいですけど、イリヤちゃんの方も更新しないと駄目ですよ？」

T「サー、PC姉さんの調子次第やけど、頑張るぜ……！」

其の六（前書き）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞樹の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答にはいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

不知火希咲の答え

『俺の妹』

不知火葵の答え

『私の兄』

教師のコメント

仲のいい御兄妹ですね。

其の六

さて、補充試験を途中で終わって俺もいよいよ戦争に参加や。確か今フィールドは化学しかなかった筈、ならさっきの試験科目の日本史がないから、先生を呼んでくることになった。

日本史の先生は確か、……？　わからん。まあエエか、所詮モブや。

その先生と共にFクラスとDクラスの戦場へ殴り込みにかかる。俺の役目は5人倒すのと、相手にFクラスには強敵がいるという恐怖心を与えること、そして姫路のための時間稼ぎや。俺はたった一人の遊撃隊やからな、単体で乗り込んできたんや。せやから相手に気づかれずに戦線にこれたんや。

お、ちょうど化学のフィールドに入っていない生徒がおるやん。早速勝負や！

「先生！　Fクラスの不知火が召喚を行います。試獣^{サモン}召喚！」

「新手か！　日本史には自信ある！　試獣^{サモン}召喚！」

召喚獣の基本的な格好は、デフォルメされた不知火希咲や。それに点数に応じた装備が付与される。

俺の場合は……真っ青な……タイツ……！　それに紅い槍。そうかこれは……

ランサーのサーヴァント、クーフリーンやな！！

格好はオイといて、これなら能力はやバイ筈や。よし勝つる！！

『Dクラス 篠原啓太 VS Fクラス 不知火希咲』

日本史 102点 332点 』

「な、なんだって！？ お前、本当にFクラスか！？」

「残念やったな、俺は正真正銘Fクラスや！！ —— お前の心臓、貰い受ける！！」

俺の召喚獣の紅い槍、ゲイボルグが怪しく光り始める。これが、絶対必中の一撃……

「ゲイ・ボルグ 刺し穿つ死棘の槍！！！」

渾身の力を以って、投擲されたゲイボルグは音速を凌駕し敵の召喚獣の心臓を抉り取る。もっと派手に出来へんのかなあ。ほら、血がドバツと噴出すとかさあ……。トラウマになる人続出やな。

『Dクラス 篠原啓太 VS Fクラス 不知火希咲

日本史 0点 232点』

「戦死者は補習————！！！！！！」

「え、何が起きたんだ——って嫌だー！ 地獄の補習は嫌だー——！！！！」

「憐れやな（笑）」

さて、この刺し穿つ死棘の槍。1回で100点も消費するんやな。
もう一つの方はどうなんやろ？

「こいつ、強いぞ！ みんな一斉に襲いかかるんだ！！」

「どんどんこいや——！！」

『Dクラス ×4 VS Fクラス 不

知火希咲

日本史 105点、82点、136点、97点 232点』

中々、エエ点数のヤツもあるやん。けど……名前は表示したるや……。

「この4人倒せば、おれのノルマは達成やな。お前等の心臓も——貫い受ける——！！」

なるほど、100点単位で点数を消費して、その分だけ当たたらダメージか。周りの衝撃波もダメージ判定に入る、と。これはなんか脳味噌に流れてきたんや、決して電波やないで。

「ゲイ・ボルグ突き穿つ死翔の槍!!!」

消費したのは200点、つまりそれ以下の点数やと一撃でお陀仏や。相手の最高点は136点やったから……俺の勝ちや。

『Dクラス	× 4	VS	Fクラス	不知火希咲
日本史	0点			32点』

「明久、俺はまた試験受けに行くで」

少し離れたところにおる明久に声をかける。と、

ピンポンパンポン《連絡致します》

なんやこれは？ 声はすが、すが、酢柄？ 君の声やな。作戦かいな？

《船越先生、船越先生》

船越……なんか、嫌な予感しかせーへんなあ。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

「ブッ！」

《生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事なお話があるそうです》

「……………！……………！（笑いを押し殺して、耐えている）」

ふ、船越って、あの船越女史やろ！？ 婚期逃してとうとう生徒に単位を盾に交際を迫るようになったあの船越女史やろ！？ アカ
ン！ 危険や！ 俺も過去に1回あった！

明久、お前……………自分の貞操を蔑ろにしまで勝ちたいんか……………。
……………。

「須川あああああああ—————！！！！！！！！」

なんや、酢皮君か。変な苗字やな。

明久、お前の犠牲は1週間は忘れへんで。

さあ、教室にもどって、雄二と作戦会議や。

教室に帰ると補充試験を終えたのか、雄二達が戦場に加勢する準備を整えていた。

「希咲、流石ウチの切り札だな。上々だ」

「サンキュ。けどええんか？ 最初に使ったって？」

「この戦争で勝利した時に、情報を流さないよう頼めばいいだけだろ？」

「賢いな。俺にはそんな考え浮かばなかった」

「お前はこの後はどうする？ 役目はないんだが……？」

「じゃあ、休ませて貰うわ。勝ったらメールよろ」

「ああ、約束しよう。さあ、いくぞ野郎共！！！！」

『おおおお——！！！！！！！！』

雄たけびと共に教室を出ていく雄二率いる補給部隊。さて、俺は一眠りしようかなあ。

zzz、zzz、zzz……。

♂ ♀ ♂ ♀

「俺、お前の事が好きや——」

気づけば、好きになっとった。男と女に友情は有り得ない。情熱、敵意、崇拜、恋愛はある。しかし友情はないって言うたのは、誰やったか……。

アイツは俺のことを親友だと言ってくれた。

やけど、自分の気持ちに素直になったらアイツのことが好きやつ

たなんてすぐにわかった。一瞬で何かが心の中を満たした。それどころか、溢れだした。これが……恋をしたってことか……。

「ごめんなさいっ」

……。初恋は実らない、とは誰が言ったんやろか……。

○
+ ○
○
+ ○

「おい、希咲。起きろ……希咲っ希咲！」

「ぎゃああああああああああああああああ！！！！？」

「う、うおっ！？ イキナリどうしたんだ！？」

「はあ、はあ、はあ……。すまん、ちよいと昔の黒歴史を夢の中で見ただけや。気にすんな」

「お、おう……」

しばらく見てなかったんやけどなあ。なんで急に……。去年のことや、俺の初の失恋。

告白するも玉砕。そいつとは気まずくなくなったまま3学期の前にここに転校。出来れば、あの関係を修復したい。

泣きそうや……。ぐず、えぐ。

「お、おい、大丈夫か……？」

雄二が慰めてくる。けどそれが俺の心を更にキリキリと締め付ける。

ええねん、ええねん。どうせ俺はメンタルがしょぼいねん。去年色々あったけど結局あんま変わってないし……。

「帰る……」

「き、気をつけて帰れよ……。大丈夫か、アイツ？」

メンタルがポッキー状態やと、何が起きても対処出来へんから、
Aクラスに行つて葵と一緒に帰る事にした。

♂ ♀ ♂ ♀

教室に忘れ物を取りに行こうとしたら、姫路と明久がエエ雰囲気
でおったから俺は何も言わず教室のドアを閉めた。中から「これは
違うんです！ 不知火君！ 吉井君が私の、そのラブレターを勝手に
に……」とか、「死ね！ 不知火！！ この裏切り者！！」とか
明久が暴走しとったけど無視、ガン無視。

今の俺は、無利益、無責任、無干渉を貫いとるんや。何を言つて
も聞きはせんで。例外は件の初恋の相手とそいつの主、そして葵だ
けや。

其の六（後書き）

希咲の過去の話は一卷が終われば、外伝としてします。多分、いや、きっと……。

其の七

家に帰るとすぐに自分の部屋に行った。俺の部屋は二階にあるんや……。

しばらくぼおつとしとるとドアの外から葵の声が聞こえてきた。

「兄さん？ ご飯出来たけど」

「……。今日はええわ」

「食欲ないの？ 食べる気になったらいつでも言ってね」

「……。おう」

元気が出えへん。やっぱりあの夢のせえか……。なんで今さらやねん……。明日になってもこんな調子やと……。雄二がめっちゃ心配する……。あと明久とか秀吉にも。ムツッリー二もなんだかんだで優しいからな。みんなエエヤツらやでな……。

雄二はなんでか知らんけど、心配しいやでな。召喚戦争の事もあるし、何とか明日までには……。

「はあ」

未練がましいな……。アイツの携帯の番号教えてもらたけど、転校してから一回も掛けてないし。結局何も成長出来てへんのや、俺は……。

カバンの中から携帯のバイブ音が聞こえてきた。雄二とかやと明日の作戦の事があるからすぐにとる事にした。俺の携帯は今をときめくスマートフォン。防水加工。さて、誰からの電話や……？

『

』

携帯に映った名前を見て、身体が硬直した。だってそこに映っていた名前は……

——俺の初恋の相手やったからや。

♂
♀
♂
♀

「葵、すまへんかった」

「ふえ？ どうしたの、兄さん。いきなり……」

「いや、さっきは素っ気無い態度とったたでなあ。その侘びや」

「別によかったのに……」

ぐう。

どこからともなくお腹のなった音が聞こえた。俺やないし、葵はさっきご飯食った筈……？

「こ、これはねお兄ちゃん／＼／＼／＼一人でご飯を食べるのも寂

しいし、ダイエットにもちょうどいいかなって…… / / / / /

「葵……。一緒にご飯食おか？」

「え、あ、その……うん / / / / /」

それから風呂入って、自室で11時くらいまで勉強して——無論、歴史オンリーや——そろそろ寝よかなあって思った矢先。コンコンと可愛らしいノックと共に葵の声が聞こえてきた。

「お、お兄ちゃん……？ 入っていい？」

「構へんで、入ってきいや」

がちやり、とドアが開いてパジャマ姿の葵が入ってきた。……枕を抱いて。

「どしたんや、葵？」

「あのね……その……今日、兄さん元気なかったでしょ？ だから、その寂しいんだったら一緒に寝てあげても……その、いいよ？ / / / / /」

途中で恥ずかしくなってきたのか、顔を林檎みたいに真っ赤にさせ俯き気味なうて言った。……兄貴失格やなあ。妹にこんなにも心

配させて……。

「ありがとうな、葵」

そう呟くと、俺はそつと寝た。シカトやあらへん、反応に、ツツ
コミに困っただけや。

結局布団の中に入ってきたけど、抱きついてくれるのは嬉しいん
や。けどな、けどな……！

首は閉めんといってくれえ……！！！！！！

寝たのに夢を見てないよ！ やったね、たえちゃん！（人はそれ
を気絶と呼ぶ）

早起きが出来た。6時。葵は朝ご飯と昼の弁当を作って……あれ？何か忘れとるような……。

「あー。葵？ 今日は昼ご飯なあ、姫路が作ってくれるって言うもんでいらんで？」

「え……？」

ガシャーン

ちょうど小皿か何かを洗っていたんやろ、それが落ちた、と。葵が、驚愕に満ちた顔でこちらを向く。

「ダメ！ 絶対ダメ！ 兄さん、忘れたの！？」

「え、何を……？」

「小学校のとき、瑞希ちゃんの大^{じやうりやう}量破壊兵器を食べて生死の境を彷徨ったんだよ！？」

「……そ、そんなわけ……ある……はずが……ないやろ……？」

だんだんと声のトーンが落ちていく。確か、小学校の調理実習で姫路が作った事があった。けど、食べた記憶がない……。もしかして……。

「それは身体の防衛本能が働いて記憶を削除したんだよ!」

「そこまで危険やったん!？」

「瑞希ちゃんの戦略的毒物じゆうぶつは根本的に間違ってるの!」

ええー、どうしようかな……。張り切って現在進行形で今も作つとるやろし、今さらやっぱいらんとか言えへんし……。多分、皆他に昼ご飯をもつて来ーへんやろし……。

よし、明久を生贄にしよう(・ω・) キリッ

雄二とムツツリー二と秀吉にはメールを……。『デンジャー、各自学校に朝早く昼ご飯を持って来い。明久には伝えるな』と。これよし。島田には……。アカン。メアドも電話番号も知らんわ……。まあえっか。アイツは明久が好きそうやし、一緒に死んでもらおうか。

「2人は尊い犠牲となったんや、俺達の平和という……」

ナイスやで、葵。これで俺達の胃袋は守られた……!

「朝ご飯出来たよ、今日は一緒に食べよう!」

「おう、それじゃ」

「「いただきす！」」

久しぶりに朝早く起きた日のご飯は、やけに美味しく感じた。

♂ ♀ ♂ ♀

葵と一緒に約束通り姫路の家に弁当を取りに行く。ああ、何故断罪用拷問道具を自ら持って来やなアカンのや……。S A N 値がガツツリ下がってる。

玄関の前に行って、チャイムを押す

「おはよ、姫路」

「お久しぶりです。瑞希ちゃん」

「お、おはようございますっ 不知火君。そして、お久しぶりです、

葵ちゃん！」

イエーイ、と葵と姫路がハイタッチ。そして始まるガールズトーク……。

「俺、先行くでな〜」

姫路の持つてる弁当箱を受け取って、ダッシュで学園に向かう。早う行ってアイツらに説明せんと……！

「あ、待ってください……行っちゃいました……」

「ごめんね瑞希ちゃん。兄さん、ちょっと朝から忙しいんだって。多分召喚戦争のことじゃない？」

「それなら、私も……」

「出来るだけ周りに知られたくないんじゃない？ 情報の漏洩を防ぐとか」

「あ、成るほど。それなら仕方ないですね……」

「き、気を落とさないで。瑞希ちゃん」

「はい……」

♂
♀
♂
♀

i n Fクラス

「諸君、私達は大変なことをしてしまった……」

「『ゴクリッ……』」

この場には俺、雄二、秀吉、ムツリーニがある。無論オムロン、あの明久はいない。とりま、作戦の第一段階コンプリート。こっからが……本番や。

「諸君に集まってもらったのは他でもない……。俺達の胃袋の平和のためや」

「一体に……何があつたんだ？」

他でもない俺のシリアスっぷりに雄二が緊張しながら聞いてくる。それに俺は、渾身の説明を以って答える！

「実は……！　かくかくしかじかで」

「「「わかるかつ！」」」

「えゝ、わかれよゝゝ」

仕方がないので説明。全部話すとメンドイから所々を端折って。

「成るほど……それが本当なら、かなり不味いことにだな」

「料理が？」

「違う！　……まあ、そうだが。恐らく、姫路の大量破壊兵器りょうりはもつと酷いことになっているだろう」

「なぜじゃ？」

「……… 言えば姫路が傷つくから、誰も言えない。被害者は強制的にシャットダウン」

「俺のことが」

ともかく、これで第二段階コンプリート。あとは俺の作戦を皆に言えば……。

「雄二、秀吉、ムッツリーニ。俺に提案がある」

「ほう……それは？」

「生贄や」

「誰をじゃ？」

「無論オムロン、明久。そしてオマケに島田」

「……………明久だけでよくないか…………？」

「島田のメアドも電話番号も知らんからどうしようもない」

「なら、具体的な内容を教えてくれ」

「らじゃ、まずはこの中の誰かが姫路の料理の皮を被ったナニカを
食べる」

「「「！？」」」

「心配すんなや、食べるフリをすればエエ。そんでうまそうにする。
そしたら恐らく明久は料理という皮を被ったナニカを食べようとす
るやろ、腹ペコやからな。雄二、皆で食い始める前にジューズでも
買ってきてくれ。ちょうどエエ具合に帰ってきて一氣に攻め落とす」

「なら、秀吉は明久が気を失ったとき用に声真似をしてもらうか」

「了解じゃ」

「ムッツリーニ、最初の囀役を頼めるか？」

「……………了解」

「雄二が来て期を熟したら俺は合図する。俺が姫路を引き付けとる間にお前等であの戦^{りょうり}略的毒物を明久で処理してくれ」

「おう！ 成功の暁には俺達だけでうまい昼飯を食おう！」

「「「おおー！！！」」」

ああ、俺達のなにがいけなかったのだろう。作戦は完璧だったのに…………。

ところで、1時間目の数学のテスト。監督は船越女史やってえ。よかったな明久。

昼休み、明久は俺の予想通り腹を空かしていた……が、まさか塩水を持って来るとは思いもしなかった。そんな金に困つとるんやったらバイトでもすればエエのに。

「あ、あの皆さん……」

姫路が俺等の方をみて、何かを提案しそうに言った。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食行く？」

明久、お前昨日のこと忘れとるんか。全くお前の頭は機能してないな。

「あ、いえ。え、えつと……、お、お昼なんですけど、その、昨日のお約束の……」

このもじもじしてる姫路だけを切り取れば、めっちゃエエ娘やのに……どうしてこうなった……。

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

流石秀吉。ナイスポーカーフェイス。あの真実を知っておきながら顔を引きつらせず、何もやましいことはありませんよ、みたいな表情。こんだけ出来やな園芸部……ちゃう、演劇部のホープは務まらんっちゆうことか。

てか、姫路。迷惑じゃなかったらどうぞって……。真実を知ったら俺はお断りしますやで。某歌のロボットみたく、思いっきりお断りしますで。

「迷惑なもんか！ ね、雄二」

「あ、ああ、そうだな、だろ？ ムツツリーニ」

「！？……………（コクコクッ！）」

「そ、そうですか。良かったあゝ」

雄二、顔が引き攣つとる。ムツツリーニ、めっちゃ焦りすぎ。バカやから気づいてないけど、もうちょっと秀吉を見習えや。雄二は特にな。俺等のリーダーなんやから、ハツタリかますときは重要やで？

まあ、大事なときはちゃんとすると信じとるけどさ。

「むー……………っ。瑞樹って意外と積極的なのね……………」

俺と姫路を交互に見ながら値定めをするかのように見てくる島田。なんや、顔にゴミでもついとるんか？ 女の気持ちは俺にはよくわからん。そして明久は未来永劫、輪廻転生、生まれ変わってもたとしてもわからんやろ。

「それでは、折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなく、屋上でも行くかのう」

「そうだね」

どこで食おうとも、お前が犠牲になることは必然なんやけど、せめて日の当たるところで最後を迎えさせたい秀吉のSっぷりに乾杯。

「激しく勘違いをされておる気が……とこれは前にも言ったのう」

「それなら、お前等は先に行っていてくれ」

「ん？ 雄二はどっか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ！ それならウチも行く！ 1人じゃ持ち切れないでしょ？」

…… ああ、多分明久について聞くんやろ。好きなタイプとか、好きな料理とか。あいつはダンカン……なのうて鈍感やでな。積極的にならな落せへんで、島田？

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

余計な犠牲が無くなってよかったのか、どうのなやら。事情を知らへん島田が何をするか不確定要素の1つやったし、これで雄二が事情を話せばこっち側に勧誘出来る。自分の命と好きな人の命……どっちを犠牲にするかなんて、天秤にかけるまでもないけど……。

「きちんと俺達の分とっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

心配ご無用や明久。絶対残るからな。ムツツリの演技によるが……万が一の事があれば無理やりムツツリのヤツに食わせることも俺は辞さないんやけど。

「そうは遅くならないはずだ。それじゃ、行ってくる」

いよいよ、俺達の命を賭けた聖戦の火蓋を切って落されようとした……！

其の七（後書き）

一卷は其の十までを予想しております。

其の八（前書き）

希咲の挿絵が入っておりやす。イメージを壊したくない方は御注意を。すぐに入っているのでお気をつけて。

其の八

MISSION:IMPOSSIBLE:BAKA

実行不可能な指令を受け、頭脳と体力の限りを尽くしてこれを行す、プロフェッショナル達の秘密機関である

MISSION:IMPOSSIBLE:BAKA

「俺、この戦いが終わったら……うまいご飯を食べるんや」

「希咲よ……。即行に死亡フラグを経てるものではないぞ」

「心配すんなや。今日はわざわざ髪型も変えたんやし」

「そういえばそうじゃったのう。いつもは適当なのじゃが」

「早起きしたからな、葵にセットしてもらた」

>i29430—3782<

「中々可愛いではないか」

「にしてもあの野郎……制服が当初はなしくてどういことやねん」

それはそれとしてやな
閑話休題

「（これより、俺達はコールサインを使う）」

「（サー！）」

「（俺はForce1、秀吉はForce2、ムッツリーニはERO1だ。わかったな？）」

「（サー！）」

「（！？）」

「（こちら、ERO1！ きちんとしろ！）」

「（……………なんで、俺だけ……………）」

さあ、ミッションスタートや！

「（こちらForce1。目標確認。これより作戦に移る）」

「（こちらForce2。毒物を確認。これより監視に専念するのじゃ）」

「（……………こちらERO1。雄二から伝令、もうすぐ戻ってくるとのこと。これより囷作戦を執行する）」

「（GOOD LUCK!!!）」

「天気がよくてなによりじゃな」

「せやな、明久。しっかり女神様にお祈りして食うんやで？」

上手く行けば、死なへんかもな。まあ、明久の衰弱しきつた胃袋やと死亡率は9割は超えとる筈。

「うん！ 姫路さん、ありがとう！」

「い、いえ……。 （本当は不知火君にいっぱい食べてほしいですけど……）」

「呼んだか？ 姫路」

「なんでもありません!？」

イキナリキョドッたな、姫路。 なんか……嫌な予感がある。

「あ、シートもあるんですよ」

「準備工工なあ姫路は。 うん、今日は風も程良く吹いてて気持ちよさそうやわ」

「……………（コクリッ）」

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

そう言って姫路が重箱の蓋を開ける。なかには色とりどりの料理が入ってる。一見なんの変哲もない弁当箱やけど……。

ためしに匂いを嗅いでみたら……無臭やて……！？ いや多少の匂いはあるはずやろ！！ 姫路の毒料理作りはそんなレベルまで……！

いや、考えてみい。見た目普通、匂いは無臭やけど怪しいものではない。そして姫路という可愛い娘が作った料理やで？ めっちゃタチ悪いやん。男は殆ど引かかるやん。例外は久保とかのBL野郎だけやな。

「おおっ！」

『Oh……』

上のは明久、下のは俺等3人の歓声や。テンションの違いが丸わかりやろ？

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

「……………（ヒョイ）」

圈作戦、まずはERO1が姫路の料理を食うフリをする。そして、明久がそれに続いて食うやろ。そしたら、なんらかのアクションが

あり、恐らく痙攣、失神などの症状がでる。失神したときようにForce2が声真似をすればエエやる。

「……………（モグモグ、ゴックン）……………うまい」

「本当ですか土屋君！　ありがとうございます」

実際は明久と姫路の死角になるようにして、口を開けてエビフリヤーを放り込んだように見せかけただけ。ほれ、エビフリヤーが地面に落ちとる。

「（さっさと回収しろ、ERO1!）」

「（……………不本意だが、了解）」

ムツツリ…………ERO1がさっさとエビフリヤーを回収する。これでバれないな。

「ずるいよムツツリーニ。それじゃ僕もいただきます」

それと同じ位に雄二が帰って「ゴフツ！」きて、ああちょうど姫路が雄二と島田に気がついて明久の方を見てなかったわ。これはラッキー。

雄二にアイコンタクトを送る、『内容は第一段階突破。第二段階に移行する』。雄二からは『了解』、よし、狼煙を上げる！　ここが天下分け目の大戦や！　Force2、ERO1、準備に取りかけれ！

「姫路、ちょっと俺の方を向いて話を聞いてくれへんか？」

「へ！？ な、ななんでしょうかがかか不知火君！？」

「いや、ちよつとな姫路に言いたいことが……」

そこまで言いかけて、何を言えいいか考えてなかった。ええい！ 早く考えんか！

「あ、え、えと話っていうのはな……？」

「はい、なんででしょう？（にこにこ）」

ああ、なんでそこでめっちゃ笑顔やねん。俺やって家で某動画サイト見てニコニコしたい。

ここでまさかの孔明、いや孔明久けいめいひさの罫か。……？ まてよ、深く考えるんや。昔、俺等3人はお互いのことを名前で呼んどった筈……。よし。

「姫路、俺等小学校の時は互いに下の名前で呼んどったよな？ ならさ、また呼び合うや。そっちの方が懐かしし、気分もエエやる？」

「ふえ！？ ああ、はい！ そうですね。ぜひ！ そうしましょう！ き、希咲君／／／／」

「おう、瑞希！」

ちらつと、横目で明久を見る。そして弁当を見る。雄二が明久を羽交い絞めにして、瑞希の謎の物体XをERO1とForce2が明久で処理をし終わろうといていた。雄二からアイコンタクトあり、

えと『あと少しで処理が終わる。1分でいい、時間を稼いでくれ』
……なんと、明久のくせになかなか強情やな。

せつかく俺等がもう一生モノ食わんでもエエようにしようとし
んのに……何が不満なんや？

「瑞希、あと1つ聞いてエエか？」

「はい、どうぞ」

色んな記憶が走馬灯のように駆け巡る。……去年？ まあ、大変
やったただけ言わせて貰おう。それはさておき、俺の記憶は昨日の
ことをフラッシュバックしていた。

これは……教室？ やな。居るのは明久と瑞希やな……。明久が
持つとるのは……封筒？ と同時にあの去り際の台詞がリピートさ
れた。

『これは違うんです！ 不知火君！ 吉井君が私の、そのラブレタ
ーを勝手に……』

『死ね！ 不知火！！ この裏切り者！！！！』

明久の台詞はいらん。わけわからんからな。さて、問題は瑞希の
方やな。ふむふむ、ラブレターとはな……。よし、この話題やっ
たら食いつくやろ。島田も便乗してくれたらなおよろし。

「瑞希の好きな人って誰なん？」

「へっ？／＼／＼／」

お顔が真っ赤になり、それはそれは大層赤く、顔で茶が沸かせられる程……。とこんなんはオイといて、大事なものは時間稼ぎや。

「瑞希、ちゃんと答えてくれ。俺（等）の未来のため……！」

「希咲君の未来のため！？／／／／／は、はふう」

ボタン、キュゥ。

「あれ？」

「……………」

なんや、島田からの視線が痛かった。

喜びも束の間、姫路が処理落ちから復活し俺等に新たなる試練を与えてきた。それは……。

「実はですね——デザートもあるんですよ」

めっちゃエエ顔でヨーグルト（に似たナニカ）が入ったタッパーを取り出した。それを見て島田がやったー！ とよろ昆布状態やったけど。俺等には死刑宣告他ならない。油断させといて、最後にぬツ殺すとはどんな鬼畜なんや……。

明久は話しかけても「返事がない。ただの屍のようだ」しか返って来うへんし、もう役にたたへん。ここは俺等の誰かが犠牲になるしかないんか……。

もとより、捨てるなんて考えはないで。女の子の作った料理を食べずに捨てるなんて男としてアカンやろ。てか、捨てたところでなんか色んなモノを溶解しそうで怖いし……。本音を言えば、この場からさっさと逃げたいんやけど。

「ごめんなさいっ、スプーンを忘れてきちゃいましたっ」

好都合、これで瑞希は教室にスプーンをとりに行くやろ。その間にヨーグルト（の名前を被った悪魔）を処理する。犠牲になるのは……俺1人でエエ。もとは瑞希が俺のために作ってきてくれたんや。無事に生きて返ってこれたら、真実を打ち明けよう。葵に頼んで料理の仕方を伝授させてやろう。

そう心に誓い、いざラスボスに挑む。心境はHP1、MP1、仲間は全員眠っている状態。オワタ。

「雄二、Force 2、ERO1。この後のことは……任せたで……」

「やめろ希咲！ お前が犠牲にならなくても……！」

「そうじゃ、早まるでない！ なんなら『鉄の胃袋』と呼ばれたこのワシが！」

「……………自殺行為」

「み、みんなしてどうしたのよ!？」

島田が戦々恐々しているなかで、皆が俺を止めようとする。

「皆……。元はと言えば、俺の責任や。俺が落し前をつける」

『クッ!』

皆が俺から顔をそらし、下を向いて方をプルプル震わせている。
ああ、これでエエんや。

「また来世も、バカやるな？」

3人の瞳から、心の汗が流れ落ち、そして俺に向かって敬礼をしてきてくれた。

「では……いただきます」

タッパーを手にとり、いぜ行かん天国へ、それとも地獄。どちら

にせよ、生きて返れる保障はない。

喉に流れ込むと、一見爽やかな喉越しだったが、一気にドロドロとして喉に粘りがしつこく残り、さらに炎で炙られているかのような辛さが襲いかかってきた。

「ゴバツ!？」

『大丈夫か!？』

「……俺の遺言を聞いてくれ……。秀吉、このデザートの名を騙る魔王は鉄を容赦なく溶かすで……」

そう言っただけ、俺はピクリとも動かなくなった。おい、誰や（死亡）フラグ回収は完璧だな（笑）とかほざくヤツ。

その後、三途の川っぽいところで明久に会ったけど、なんかキモかったからボツコボコにして来た道に戻った。

「はぁあっ……たるっ……（○・△・）ノ・オ・、ヨウ○」
く（△・、●） 諸君」

「起きたか希咲。これからBクラス戦の話をするぞ」

「らじやりますた……ところで明久は？」

『さあ？』

「さいですか。……まあ、ギャグ補正がかつとるからその内沸いてくるやろ」

「そうだな」

「そうじゃな」

「……………そうだな」

「そうね」

「え、えとギャグ補正ってなんですか？」

「アホのみが使える禁術。並大抵のことでは死なへん。例えば……瑞希、お前の料理を食ってもな」

「え……私の料理ですか……？」

「ああ、残念やけどお前は、容姿端麗、才色兼備やけど……料理はてんでダメっちゅうドジッ娘キャラや。……雄二、俺待つつてくれみたいけやど、話進めとして」

「わかった」

「そ、そんな……」

「心配すんな、まだ末期やない。料理教室に通え……つてのも考えてたけどな、別の考えが思いついた」

「なんですか……？」

「瑞希、お前の中で一番料理が上手やと思っのは？」

「やっぱり、お母さんでしょうか？ でも教えてもらうにしてもお仕事忙しいですし……」

「せやな。そしたら、もう1人くらい上手なヤツ思いつかへんか？」

「……あ、もしかして葵ちゃんですか！？」

「うむ。アヤツならばきっと瑞希の料理を改善してくれるに違いない」

「けど、いいんですか？ その、お世話になってしまっても……」

「俺が頼む。瑞希には上手い料理を作ってもらいたいからな」

「そ、そんな／＼／＼でも希咲君のためなら／＼／＼」

「あい、これで終了！ 作戦会議のほうに入るで」

「……だ、ダメですよ。希咲君／＼／＼まだ私達にはそ、そんなこと早いですよ／＼／＼はふう」

「ダメだこりゃ」

♂ ♀ ♂ ♀

雄二から簡単な説明を聞いた。Dクラスとの契約、Aクラス戦への対策、そしてBクラスに勝ったときの新たな契約など。いやはや、やはり腐っても神童。色々考えてんやなあ。

そして明久がちょうど目覚めたからBクラスへの宣戦布告に行つて来いと命令したが、反発。仕方がなしにじゃんけんをして決める

ことにした。

「普通にやっても面白ないやろ？ 心理戦ありでしょうや」

「心理戦？ いいね、早速しよつか。僕は……グーを出すよ」

「そか、なら……明久がグーを出さんたら、生きてきた事を後悔させるほどの苦痛を味合わせる」

「え、ちょ、なにそれ！？」

「最初はグー、じゃんけん」

「あああつ！」

俺、パー。明久、グー。

「決定やな、今日のテスト終わったら行って来いよ明久」

「納得いかない！」

「お前、Dクラス戦みたいに殴られることを気にしてるのか？」

「それもある！」

「あのなあ明久、今回に限っては大丈夫や。な、雄二」

「おう、なんせBクラスは美少年が大好きだからな」

「そっか、それなら大丈夫だね！」

こいつの頭では美少年が大好き↓男女問わず↓アッーな展開も予想出来へんのか。

「けど、明久はブツサイクやしなあ」

「失礼な！ 365。どっからどう見ても美少年じゃないか！」

「5。多いぞ」

「……………実質5。」

「明久はブサイクやのうて、微少年（少年であるかすら疑わしい）やもんな」

「皆なんて大嫌いだ！」

「……とにかく、頼んだぞ」

泣きながら去っていく明久はどこか滑稽であった。チョーウケるんですけどwwwみたいな？

其の八（後書き）

安西先生……絵が上手になりたいです……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3339v/>

バカ×オリ主×似非関西弁 = バカの三乗

2011年10月8日04時51分発行